

氷室冴子

あお
碧の迷宮
(上)



あお めい きゆう
碧の迷宮

(上)

ひ むろさえ こ
氷室冴子



角川文庫 7695

平成元年十月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)八一七—八四五—

営業部(〇三)八一七—八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

江苏工业学院图书馆

藏书章



角川文庫 7695

目次

第一章	三井の宮の死	五
第二章	失われた日々	六
第三章	動きだす日々	一三
第四章	二の姫婉子	一五
第五章	源の宰相朝高	一九

イラスト
福山小夜

へ上巻の主な登場人物へ

香姫……安房守のむすめ。十八歳。

紀姫……香姫の姉。二年前、謎の入水自殺をとげる。

三井の宮……前帝の第三子。一年前、帝の崩御にあわせて出家。二十八歳。

源婉子……太政大臣家の二の姫。十七歳。三井の宮の許嫁。

源朝高……婉子の兄。参議。源の宰相ともよばれる。三井の宮と親友。二十四歳。

弘徽殿女御……太政大臣家一の姫。婉子や朝高の姉。二十五歳。

阿倍時棟……地方の郡司の息子。二十五歳。

於智……時棟の許嫁。十九歳。

千斗……時棟の妹。十七歳。

宮路

鈴鹿……女房ら。

弁の君

第一章 三井の宮の死

わたくしたち一行が四条西の邸にひっそりとしたのは、夜もふけて、目のまえの女房らの桂の色目さえ、ようは見えないころだった。

がたがたとゆれる牛車が、なにかに乗りあげたのか、がくんと大揺れして、とまった。あたりは不気味なほど、しんとしていた。

いや、ちがう。

はや、夏のおとずれをつげる、山時鳥の、ぎいぎいという不吉な鳴き声とする。心のどかであれば、待ちかねた鳴き声でもあろうに。

今宵、耳にする時鳥はまた、なんと苦しげにきこえることだろう。

千斗という娘の膝に、うち伏すようにして体を横たえていたわたくしは、

「ほととぎすの声だわ。哀しい声なことね」と夢うつつに、ぼんやりとつぶやいた。

「まあ、姫さま。鳥の声など……」

わたくしの頭をなでていた千斗は、あきれたように口ごもり、息をのんだ。

しばらくして、千斗の忍び泣くさまが、彼女の膝をとおして、わたくしに小刻みにつつわってきた。

千斗の膝は、これから、わたくしたちを待ちうける騒動をおもってか、がたがたと小さく震えていた。

「姫さま。香姫さま。わたしたち、どうなるのでしょうか」

という千斗の声もまた、あわれをとおりこして、なにやら可笑しく思われるほど、震えているのだった。

「氣をつよくおもち。おまえの罪ではないわ」

と、わたくしはそれだけをいうのが、やっとだった。

にわかに吐き氣が胸もとをつきあげてきて、体じゅうから、すうと力が抜けてしまったのだ。

まるで、まだ湖の底にただよい、目のまえでゆらゆらとゆれる水藻のように、たあいもなく、水底にひきこまれてゆくようだった。

近江の湖の水は、なんと冷たく、なんと深く、また美しかったろう。

海とはちがう、波ひとつない、おだやかな、碧い水の群れ。

強い力で、湖の底にひきこまれそうになった刹那、わたくしは湖面にうかんだ三日月を

みた。

若い女の眉引きまゆびのような、うるわしい赤い月。

沈んでゆくわたくしの目に、ゆらゆらとゆれる眉月まゆづきは、なにかの哀しみにたえて、歪ゆがんでいるようにも見えた。

(ねえさま！)

わたくしには、それが亡き姉・紀姫きのひめの、あえかに描いた眉そのもののようにも思え、月夜とてまだ三日月、ほとんど闇やみばかりの視界に、ぬらぬらとゆらぐ湖面のさざなみが、きりきりと、紀姫の笑うほどに口元からこぼれた、つややかな鉄漿おはぐろのひらめきのようにも見えたことだった。

わたくしは幾度となく、湖面にうかびあがろうと、かいのない努力をかさねた。

水は喉のどをおそい、ちらばった自らの黒髪が腕に、首にゆるやかに纏まといつき、もはや、これまでと思ひさだめたとき、ふいと湖の底から押しあげられたようにも思えたのは、やはり、亡き姉の加護でもあったろうか。

「宮路みやじどの。お車は、じかに西の庭さきにつけます。姫さまをすぐに、お部屋へ」

牛車ぎゅうしゃの物見窓のちかくで、ひそひそと従者の声がした。

その声もまた、このお邸すべての者の怖れおそをひきうけているかのように、震えていた。牛車はゆるゆると、繁る下草を踏みしだいてすすみ、やがてまた、止まった。

牛のはずされる音、榻じのおかれる音。

そうして、車はゆるゆるとわずかに前かがみになって、びたりと止まった。

前簾まきだれがまきあげられ、千斗ともうひとり、先刻からひとことも口をきかなかった老女房の宮路が、わずかに身じろぎした。

「姫さま、お起きになれますか。ご無理なら……」

「いいえ、起きましよう」

わたくしは氣丈にこたえ、ゆっくりと身をおこした。

まだ、吐き氣が胸もとでとまっていたが、かまいはしなかった。

わたくしは車先に出迎えていた、みもしらぬ、まだ女童めわらわともみえるほどの女房がさしだす手に、手をのせた。

若い女房はわたくしの手に触れ、びくんと身を硬くした。

それがなにやら、ひどく興をそそられ、わたくしは思わず、その女房の顔をのぞきこんでしまったことだった。

この若い女房は、わたくしを死に神のようにも思っているのだろうか。

女房にかかえられるようにして、わたくしは車を降り、段まきをのぼった。

わたくしの部屋は、七年前とおなじように、なにも変わってはいなかった。

部屋のすみにある二階厨子ずし。黒塗りの文机ふくぐえ。御猫の屏風びやうぶ。

それにまた、洗面のための角盥^{つのだらひ}などが、とうに運びこまれており、すぐにも旅のよごれを洗い流せるようにはなっていたものの、わたくしはとっさに顔をそむけて、

「あれを、お下げ」

と命じた。

盥^{たらひ}になみなみと注がれた水のおもては、わずかな人の気配をとらえて、かすかに揺れていたのだ。まるで、あの近江の湖^{うみ}の面のようにな。

それは不吉なこと、おそろしいことだった。

すぐに宮路らが部屋に入ってきて、襖^{ふすま}をあげた。

襖のむこうには、すでに夜具がととのえられ、枕^{まくら}もとには、病人のための、黒塗りの水盤もあった。

「用意のいいこと」

わたくしは思わず、声をあげて笑った。われながら、癪^{かん}の高ぶった声だった。

すると、千斗がぎくりとしたように肩を震わせて、手をついた。

「姫さまは、気が高ぶっておられるのですわ。どうか、お寝^{やす}みになられてくださいませ。

明日になれば……」

といって言葉をのむのを、老女房の宮路がひきとった。

「明日になれば、ゆっくり、お寝みになることもかなわぬことですわ、香姫」

そういう宮路の声には、わかい千斗のような怖れも、怯えもなかった。

それだけにかえて、わたくしには、おそろしいもののように思われた。

なぜなら、宮路は、父・安房守が任地におもむいている間も、この京の邸にあって、ずっと留守宅をまもっていた古参女房であったから。

長い年月、北の方のいない京の邸を、主にかわって差配してきたのは、この女房だった。その宮路がきのう、一刻もはやい帰京をすすめるために、ふいに近江にあらわれたのは、思いもかけぬことであった。

わたくしの思わぬ災事をきいた縁者たちが、だれよりも頼りになる宮路を、使者にたてたという。

その宮路が、

(明日からは、ゆっくり寝むこともかなわぬ)

というからには、どれほどの難事がまちうけていることか。

わたくしは身ぶるいして、襖のむこうの部屋に入った。

千斗と宮路が両脇にたち、袂をひとつひとつ脱がせているあいだに、ばたばたと足音が忍んできた。

やがて、格子戸のむこうで、ためらいがちな女の声が出た。

「香姫さま、つつがなく、ご帰京のこと、おめでとうございます。じつは、昼ごろより、

讃岐中納言さまがお見えになられて、ぜひにも、お目通りなされたいとお待ちなのでございます」

「なんとということですか」

ふいに、それまで車中でも、表情ひとつ変えなかった宮路が、びしりと笞打むちうつようにいった。

「姫さまが、どれほどお疲れか。たとえ、一族の総領どのとは申せ、お目にかかるなど、とんでもないことです。殿さまは、どうして、そんなご無体むたいなことをお許しなされるのか」

「殿さまは、病やまいの床でございます。宮廷のお召しにも、参れないほどで。宮路どのも、ご存じでしょうに。きのう、今日と、讃岐中納言さまがお邸のいっさいを、差配なさっているありさまで……」

女房の声には、いうにいわれぬ苦々しいものがあつた。

叔父の讃岐中納言どのが、どれほど不作法な、また、どれほど威いをかさにきる俗物か、わたくしもよく覚えていた。

「姫さまは、お疲れだということです」

と吐しゃるようにいう宮路を、

「およし、宮路」

とわたくしは静かにとめた。

「どうせ、明日も今夜も、おなじこと。ならば、寝入るまえに、いやなことはすませてしまいましょう。叔父上さまに、お目通りするとおいしい」

女房の足音が遠ざかるのをききながら、わたくしはもう一度、桂をはおりなおして、部屋に戻った。

千斗が几帳をずらし、宮路はなにを思ってたか、灯台の芯をきって、うすぐらい部屋のあかりを、さらに落とした。

「宮路。叔父上さまは、どんなふうだったの。知らせをきいて」

「どうということも、ございませぬ。床につかれたお殿さまを怒鳴りつけ、女房らを怒鳴りつけ、涙声でございました。秋の除目のことなど、なにやら口走られて……」

「秋の除目……?」

あまりにも俗なことに、一瞬、気を抜かれたものの、すぐに得心がゆき、ふいに押さえようのない笑みが、口もとにのぼってきた。

「叔父上はまた、権大納言にでも昇進なされるおつもりでしたか。では、こたびのことで、その望みが、断たれておしまいなのかもしれない。お気の毒に」

わたくしの声に滲んだ、ひそやかな嘲けりの色に驚いたのか、千斗がふと、いぶかしそうに顔をあげた。

しばらくするうちに、天井の梁もゆらぐほどの足音を響かせて、とうの叔父上がやってくる気配があった。

先触れの女房が、格子戸のむこうで、

「讃岐中納言さま、おなりあそばしました」

というほどに、乱暴に格子戸があげられ、大柄な叔父上が風をきって、入ってきた。宮路がととのえる円座に、もどかしげに坐りこむやいなや、

「香姫。そこにいるのは、香姫だろうな。よもや、生き霊ではあるまい」
やはり梁をゆるがすような大声で、わめいた。

この叔父上は、しずかに語りあうことなど、生来、できぬ方であった。

「どのような姿で、おめおめ都に入れたものか。ええ？ いったい、この不始末、この不祥事を、どのように説明するのだ」

叔父上の声は、われ鐘のように響きわたり、簾垂をもゆるがす勢いであった。

わたくしは几帳のかげで、脇息により伏したまま、身じろぎもせず、宙をみつめていた。

ふしぎなことに、湖の底から浮かびあがってきてから、この二日というもの。

わたくしは、おのれが生きているのやら死んでいるのやら、ようも見さだめられぬほどの心地であったのに、こうして、口ぎたなく面罵されてはじめて、息がつけたような思い

であったのだ。

「不始末とは、小舟転覆の災事でございますか」

「災事。ただの災事というか！」

几帳をへだてているとはいへ、叔父上の体が、怒りのあまり、ぶるぶると震えているのが、床をとおして伝わってくるようだった。

「浮かれ女もどきに、夜の湖に、舟をうかべて、なにをしておったのか。あげくに舟がまろび、一緒であられた三井の宮はいもなく、みまかられたというのに、おまえのみがなにゆえ、女の身で湖岸に泳ぎついたか」

「いっそ、死んだほうがよろしゅうございましたか」

というわたくしの声に、そばに控えていた千斗が、はっとして息をのむ気配が重なり、そのまま、すうっと魂を抜かれたように、まえのめりに倒れかかった。

「これ、御前ですよ。しっかりなさい」

宮路の叱る声に、千斗はようよう氣をとり戻して、ふいに、薄縁に額をこすりつけんばかりに平伏して、

「もし、讃岐中納言さま」

震える声で、思いつめたようにいった。

「香姫さまは、なにもご存じではなかったのでございます。すべては、わたしの浅知恵で

「ございました」

「浅知恵とは、なんだ」

叔父上は苛^{いら}だたしげに、声を放った。

女房ごときに、水をさされるのをいやがる生来の権高^{けんたか}さが、声にも気配にもあらわれ、それだけで、わたくしは口をきく気力も萎^なえて、ひっそりと目を瞑^{つむ}った。

「そも、おまえはなんじゃ。この邸では、ついぞ見かけぬ顔だが」

と叔父上は鋭^{えい}くいやり、ふと、興をそられたのか、

「香姫は、安房^{あわ}の田舎から、郷長^{ごうの}の娘でも、つれもどってきたか。なにやら、豪農の娘らしいな。顔がよう陽にやけて赤らみ、あさましく、てらてらしておるわ」

という声音には、あきらかな蔑^{さげ}みの色^{いろ}があった。

「はい。わたしは近江^{かんさき}は神崎^{かみさき}の、郡司^{ぐんじ}の娘、千斗にございます。おおせのとおり、香姫さまのお優しさにすがって、都入りにおともいたしました……」

千斗は震えながら、思いつめたようにいい、

「すべては、わたしのせいにございます。香姫さまをお責めくださいますな。わたしの浅知恵が、こたびの厄災をまねいたのでございます。お責めくださいますなら、どうぞ、わたしを……」

とことばをついで、そのまま、泣き伏してしまった。